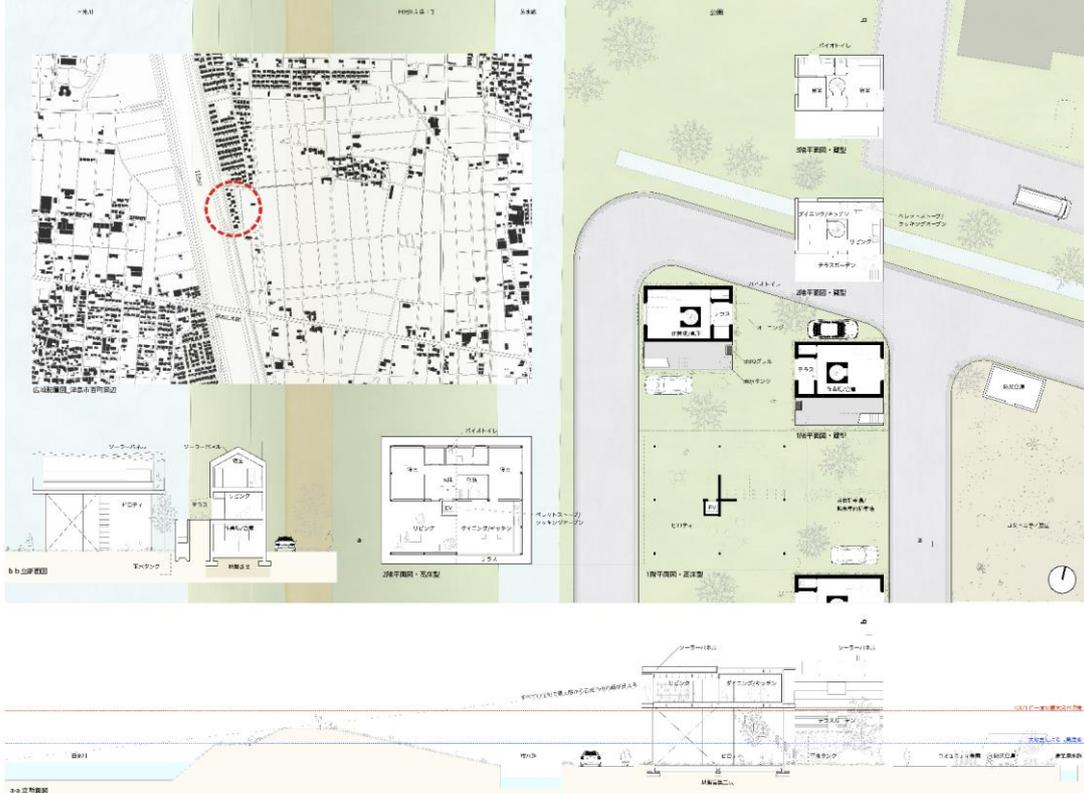


最優秀賞 水と生きる家



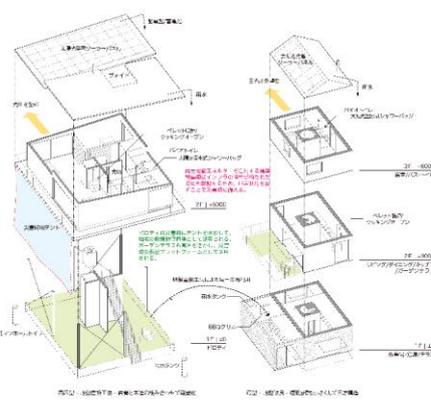
水と生きる家

清水と緑豊かな環境に囲まれ、水辺の生活と密着し住みやすさを追求した。ここでは、緑化と水辺の環境を最大限に活かすことで、水と生きる家を実現しました。

この家では、緑化と水辺の環境を最大限に活かすことで、水と生きる家を実現しました。ここでは、緑化と水辺の環境を最大限に活かすことで、水と生きる家を実現しました。

そして、これらの家では、水辺の環境を最大限に活かすことで、水と生きる家を実現しました。ここでは、緑化と水辺の環境を最大限に活かすことで、水と生きる家を実現しました。

水と生きる家の家づくりのポイントは、水と生きる家を実現しました。ここでは、緑化と水辺の環境を最大限に活かすことで、水と生きる家を実現しました。





津島の歴史は川の流れと共にあり、その居住文化は治水と共に育まれてきました。ここでは防災・減災に主眼を置きながら、津島らしい親水性のある居住文化を体現する住宅を提案します。高床型モデルは最大予想水位である 5m よりも高い位置に全ての住環境を設定しています。ホームエレベーターで建物に入ると全ての生活がワンフロアで成立します。蔵型モデルは建築面積を抑え積層させることで、安全性と経済性をバランスさせます。(中村広毅, 田名後康明)

【審査委員講評】

難波和彦審査委員長

洪水時の水位上昇を避ける伝統的な解決法として、高床式住宅と水屋式住宅の二つの手法を選定し、この手法を現代の建設技術によって読み替えた2種類の住宅の提案である。日光川に沿った南北に細長い敷地を選び、最高水位を推測することによって主要な生活空間の高さを設定した、2種類の住宅を分散的に配置し、川沿いに公園のような豊かな景観をつくり出している。高床式の軽快な住宅と水屋式の重厚な住宅という2種類の対照的な空間を並置し、住み手の選択に委ねた隙のない高度な提案といえるだろう。

朝岡市郎審査委員

2タイプの住宅モデルが提案されているがどちらのモデルも非常に優れていて、2タイプの組み合わせにより住民のコミュニティの強化が出来るなど特色ある街区の提案がされている。災害時にインフラの復興が遅れても生活できるよう非常に細かな検証がなされていることが非常に高く評価された。

生田京子審査委員

既存の環境技術を多く盛り込みながらも、建物としてはそれを感じさせない洗練された形状で、浸水に対する備えを示しています。敷地の選定や、2つの住戸パターンの提案、形態などが非常にバランス良くまとめられており、デザイン力の高さが際立つ作品でした。

川崎浩司審査委員

日光川沿いの水害・地震・液状化に耐えられるように、地盤置換工法を導入するとともに、石垣による嵩上げた倉型とピロティー型の2つの住宅モデルを提案している。また、建物の構造形式についても具体的に提示しており、近い将来、実現性の高い津島型住宅モデルといえ、高く評価される。

清水裕之審査委員

防災・減災についても的確な提案を行い、デザイン力もある欠点のない提案である。敷地の選択も良かった。つまり、優等生として、けちのつけようが無いことが最優秀に選ばれた最大の理由である。実際に、このような住宅とモデル住宅として作ってみたいと思わせる。しかし、あまりにもスマートであるがゆえに、「なにかもって欠点があってもいいから一寸

破綻してみたら」といいたくなるようなところがある。「建築が作品になる」とはそういうところではないだろうか？

日比一昭審査委員

「水と生きる家」というタイトル通り、すべての住戸から日光川の川面が見えるように設計されており、高床型と蔵型のふたつの住宅モデルの組み合わせはデザイン的にも安定感がある。あわせてグランドレベルでのオープンスペースの連続性の確保とコミュニティ農園による、地域住民との交流とそれによる地域防災力の向上と、暮らしの中で日光川を認識しながら生活することでの防災意識の向上を期待するなど、この地域の特性を活かした提案となっており、バランスのとれた、実現性の高い提案となっている。